

# シュレーゲル・コントラ・シュレーゲル

——せめぎ合う両『神話論』——

酒田健一

## 1

2006年秋、『フリードリヒ・シュレーゲル校訂版全集』全35巻<sup>1)</sup>中の著作部門全22巻——第一部『校訂新版』（第1巻から第10巻）、第二部『遺稿集』（第11巻から第22巻）——が、第15巻分冊2の『文学の講義と断章』の刊行をもって完結した。1958年の第11巻『ヨーロッパ文学研究』刊行からほぼ半世紀、その間、共同編纂者ジャン・ジャック・アンステット、主任編纂者エルンスト・ベラーを失っての完結である。第三部『書簡集』（第23巻から第32巻）、第四部『編集類、翻訳類、報告類』（第33巻から第35巻）はいまなお続刊中とはいえ、この著作両部門の完結は、フリードリヒ・シュレーゲルという知られることあまりに少なかった、というよりは知るための資料の欠落のあまりに大きかったがために多年にわたって予断と偏見に晒されてきた思想家の全体像把握を可能ならしめる基礎文献がすべて出揃ったという点で画期的である。別して1800年の『アテネウム誌』廃刊から1808年のカトリックへの改宗とウィーン移住までの8年間に行われた公私にわたる講義（イエーナ大学講義『超越論的哲学』、パリ・ケルン期の私講義『ヨーロッパ文学の歴史』、『哲学の展開12講』、『序説と論理学』、『世界歴史』、『ドイツの言語と文学』、スタール夫人のための個人講義『形而上学』）と、この時期およびそれ以後のオリエント研究ノート数冊分とが、第二部第11巻から第15巻までの5巻に、また、24歳の1796年から56歳、すなわち死の前年の1828年までの全遺稿断片が、同第16巻から第22巻までの7巻に完全収録され、この思想家の埋没した中期思想圏が初期および後期思想圏との内的連関を獲得しつつその全容を現したことの意義は大きい。

しかしここで留意すべきは、この中期思想圏の埋没にシュレーゲル自身が大きく関与していたことである。1822年から1825年にかけてウィーンのヤーコプ・マイヤー社から刊行された自選『フリードリヒ・シュレーゲル全集』（ウィーン版）<sup>2)</sup>の編纂に当たってシュレーゲルが過去のわが身に振るった大鉈がそれである。

1820年、48歳のシュレーゲルは、ナポレオン凋落後のいわゆるウィーン体制下、メッターニヒの反革命的政策に賛同するカトリック系保守派の論客を糾合した機関誌『コンコルディア』を創刊し、その編集・執筆と平行して彼自身の著作全集の準備を進めるが、自作

- 1) Kritische Friedrich-Schlegel-Ausgabe (KA). Hg. von Ernst Behler unter Mitwirkung von Hans Eichner und Jean-Jacques Anstett. Paderborn, München, Wien, 1958ff.
- 2) Friedrich Schlegels sämtliche Werke, 10 Bände, Wien 1822-1825 (W).

の集大成を意味するはずのこの『全集』の実態は、まさに『コンコルディア』誌主幹の名に恥じぬ自己検閲の産物となった。同誌第一輯を独占し、第三輯、第六輯にも書きつがれる彼の時代批判的論争書『現代の徴候』がフランス革命以後のヨーロッパ近代史をルターの宗教改革に淵源する宗教的・道徳的・思想的・政治的・社会的墮落の必然的帰結として糾弾することによって、1790年代に始まる初期ロマン主義の旗手としての彼自身の履歴をも過去の遺物として葬り去ったように — 「深遠なドイツ哲学と精神的革命の大きな円環の中から真先に、その直接的な帰結として発展してきたあの力動的な思想の遊戯、無制限な詩的・学問的幻想」の時代は「とうに過ぎ去ったのだ」<sup>3)</sup> —、この『自選全集』も、幾多の修正・加筆を施されて収録された初期の古典文献学的諸論を除き、この時期の代表作、『共和制の概念について』、レッシング、ヤコービ、フォルスターらに関する論評、『リュツェウム断章集』、『アテネウム』誌所載の諸論、断章群、そして世を騒がせた問題のロマン『ルツインデ』等々、かつてドイツの文学・思想世界の「美的無政府状態」打開の合言葉として掲げられた「美的革命」<sup>4)</sup>の一翼を担った野心作のほとんどすべてを容赦なく切り捨てたばかりでなく、この時期に続くパリ・ケルン時代の諸講義のすべてをも廃棄処分にしたのである。『アテネウム』誌所載の諸論中、辛うじて処分を免れたのは、1823年刊行の『自選全集』第5巻収録の『文学についての会話』と、1825年刊行の同第10巻収録の『ゲーテのマイスターについて』の二作のみである。

この『自選全集』はヤーコブ・マイヤー社の破綻によって第10巻をもって頓挫するが、シュレーゲルの死後、1846年にこれを引き継ぐかたちでウィーンのイグナーツ・克蘭グ社が刊行した全15巻の『全集第二版』<sup>5)</sup>も、多少の異同はあれ、『自選全集』に収録されなかったウィーン講義『近世史』、『インド人の言語と叡知について』、最後期のウィーン・ドレーズデン講義『生の哲学』、『歴史の哲学』、『言語と言葉の哲学』を加えた増補版の域を出ず、その間の1836年と1837年にC. J. H. ヴィンディシユマンが刊行したケルン私講義『哲学の展開12講』と『序説と論理学』<sup>6)</sup>は、『ルツインデ』と共に『自選全集』への採用を「よしとしなかった」著者の遺志を理由にここでも無視された<sup>7)</sup>。

ところでいわば廃嫡された「初期シュレーゲル」の復権要求は、この増補版全集の36年後の1882年にヤーコブ・ミーノアの編集になる『フリードリヒ・シュレーゲル初期著作集1794-1802』全2巻によって果たされるが、しかし最初期の古典文献学的諸論からパリ行き直前の1801年に刊行される『特性描写と批評集』までの著作の集成をもってシュレーゲルの「自己完結のかつ完璧」な「全集」(Gesamtausgabe)と見なし、「論調と方向

3) Signatur des Zeitalters. KA VII, S. 517.

4) Über das Studium der Griechischen Poesie. KA I, S. 224, 269ff.

5) Fried. v. Schlegel's sämtliche Werke. Zweite Original-Ausgabe. Wien 1846.

6) Friedrich Schlegel's Philosophische Vorlesungen aus den Jahren 1804-1806. Nebst Fragmenten vorzüglich philosophisch-theologischen Inhalts. Aus dem Nachlaß des Verewigten herausgegeben von C. J. H. Windischmann, 2 Bände. Bonn 1838 u. 1837.

7) Fried. v. Schlegel's sämtliche Werke. Zweite Original-Ausgabe. Bd. I, S. Vif.

性に変化をきたす」パリ時代以降の著作を当面の出版計画から除外したこの選集<sup>8)</sup>は、この『ミーノア版』に依拠する「初期シュレーゲル」と『増補版全集』に依拠する「後期シュレーゲル」とが — 共にパリ・ケルン時代を無視しつつ — 対峙するという禍根を残した。

それゆえシュレーゲルが書き残した一切を余すところなく収集・編纂する本来の全集企画である今回の『校訂版』がこの両期シュレーゲルの対峙の克服を課題として抱え込まざるを得なかったことは、何よりもまず確認しておかねばならない異例の事態である。シュレーゲルが未整理のまま残した膨大な遺稿の堆積をまえに呆然と佇むところから出発したこの新全集の編纂者たちの苦労は、刊行開始の翌年の1959年の『ノイエ・ルントシャウ』誌に掲載されたベラーの『新しいフリードリヒ・シュレーゲル全集』と、著作両部門の編纂も大詰めに近づきつつあった1998年にロマン主義研究誌『アテネウム』に遺稿として掲載された同じくベラー（前年の1997年9月16日に急逝）の『フリードリヒ・シュレーゲル全集の歴史』に詳しいが、編纂上の難関の一つが前記『自選全集版』に起因する初期・後期両シュレーゲルの相剋であり、ベラーにとって何よりもまず「本質的に異なる二人のフリードリヒ・シュレーゲルが存在し、その年寄りのほうが若いほうの作品に難癖をつけてきたと言わんばかりの奇妙な虚構」<sup>9)</sup>から脱却することが新全集の編纂技術的側面にも絡んでくる懸案事項の一つだったことがわかる。かくして両シュレーゲルの和解と架橋の可能性を見出そうとするベラーが到達した決着点は、「ミーノアに倣って」シュレーゲルの諸作の初出原典に基づく項目別・刊行年代順配列を原則とし、そのうち修正、削除、加筆等を施されて『自選全集版』に採用されたものについては、これら後期の「ヴァリアンテ」を初期思想の「深い意味」を解明するための「通路」たらしめる<sup>10)</sup>こと、そしてこれらの改変部分を共同編纂者ハンス・アイヒナーの提案を容れて「脚注」にまわすことであり、当初、この方式に異論のあったベラーも、最終的にはこれを最良の選択として了承し、「編纂上の問題はもはや存在しない」<sup>11)</sup>との結論に達する。

だが「脚注」がここで期待される役割を担い得ず、かえって初出原典の発想と文脈を混乱させる一例をこの方式は残した。『アテネウム』誌所載の『文学についての会話』第二章『神話についての講話』（以下、『神話論』）がそれである。同『会話』の他の三章に

- 
- 8) Friedrich Schlegel 1794-1802. Seine prosaischen Jugendschriften. 2 Bände. Hg. v. Jakob Minor. Wien 1882. 2. Aufl. 1906, Bd.1, S. VIII. ミーノアは、この2巻本の「首尾如何」によるものながらも、当時すでに「入手困難」となっていた『オイローバ』誌（1803）所載の「インドへの熱狂的な言及」を含む諸論と、同じくすでに「ほとんど所在不明」となっていたシュレーゲル自身が編纂した『レッシング著作集』（1804）への「序論的論説」数篇を念頭に第3巻を想定し、これをもってシュレーゲルの初期著作全集を締め括るつもりだったが、実現には到らなかった。
- 9) Ernst Behler: Die Neue Friedrich Schlegel-Ausgabe. In: Die Neue Rundschau, Frankfurt a. M. 1959, S. 122.
- 10) Ebd., S. 122.
- 11) Ders.: Die Geschichte der Friedrich Schlegel-Ausgabe. In: Athenäum, Jahrbuch für Romantik. Paderborn, München, Wien, Zürich 1998. S. 228.

加えられた改変が語句の修正程度にとどまったのに対して、この第二章に施された大小八十箇所を越す修正、削除、加筆は明らかに、シュレーゲルの初期ロマン主義綱領の中核を成すと共にその後の彼の思想的展開の基盤ともなったスピノザ・フィヒテ両思想圏との決別という自己否定的転向表明を意図してのそれであり、ペーラーが期待した両期シュレーゲルの相互証明的深化に資する「脚注」とはなり難いからである。以下、ルドヴィーコが論ずるアテネウム版『神話論』(Rede über die Mythologie)と、同じルドヴィーコが論ずるウィーン版『神話論』(Rede über die Mythologie und symbolische Anschauung)との相剋の実態を跡づけ、次いで『会話』の他の登場人物たちにも発言を求めたい。

## 2

近代文学はその共通の基底となる「母なる大地」を欠き、ために各人は文学的営為のすべてを自己の内面から自力で捻出せねばならない。それは「無からの創造」にも似た孤独な行為である。このような近代文学の窮状は、古代ギリシア人たちにとって神話がそうだったような中心点の欠落に起因する。ゆえにわれわれの急務は来るべき未来の文学的土壌の共通の基盤となるべき「新しい神話」の創出である。だがこの新しい近代神話は古代神話とは対照的な道をたどって到来するほかはない。古代神話が「若々しい想像力の最初の開花」として自然の胎内から誕生し、自然を範として成熟したのに対して、自然との道連れを断ち切って久しい近代人にとって、新しい神話は「自然」という古代の原理に代わる近代の原理である「精神」の「最内奥の根底」から精神それ自身によって創出されざるを得ず、しかもそれは、まさにこのような精神の自己産出物であるがゆえに「あらゆる芸術作品のうちで最も人為的なもの」でありながら、あらゆる神話と同様、「他のすべての芸術作品を包括し、太古以来の詩の永遠の源泉のための新たな川床となり、容器となり、そしてそれ自身他のすべての詩の胚芽を内蔵する無限の詩」として、「ある根源的で模倣し難い始原的なもの」、「端的に解き明かし難く」、「いかなる変形を加えられたのちにもなお太古の本性と力を仄かに輝き出させているもの」でなくてはならない。— このような新たな神話的原世界創成の可能性をアテネウム版『神話論』の論者は、「現代の偉大な現象」である観念論、絶えず「自己自身を規定し」つつ絶えず「自己を超出し、再び自己へと帰還する」精神の永遠の循環運動を本質とする観念論、「実践の見地からすれば、われわれ自身の力と自由によって実現し、伝搬すべき革命の精神、革命の原則」であり、「理論的見地からすれば、人類が全力を尽くして自己の中心点を見出そうとして苦闘する現象」の一形態である観念論と、この「観念論の胎内」から誕生し、「観念論の精神によってくまなく浸透され」ながら、同時に観念論の実質としてその無限の循環運動を支える基底となる「同様に無限の実在論」との根源的相関のうちに見出そうとする<sup>12)</sup>。

12) Rede über die Mythologie (Mythologie). KA II, S. 311-315.

この観念論と実在論との根源的相関を、論者は当面その名を伏せたまま、だが当時の誰の目にも明らかな二人の哲学的対蹠者フィヒテとスピノザとの、あるいはフィヒテの世界創造的自我の観念論と「一にして全」なる神的自然への絶対的帰依の表現であるスピノザの実在論との総合として提示する。しかし彼は、彼の競合者シェリングがこの時期に先立つ1795年に発表した『独断論と批判主義に関する哲学的書簡』においてこの同じ総合を一貫して哲学的課題として追求し、批判主義（観念論）の信奉者として独断論（実在論）との対決姿勢を崩さぬままスピノザの世界を「知的直観の客観化」と読み変えることによって、観念論の精神に浸透された実在論的自然という名状し難い全一的世界へ降り立ち、そこに超越論的スピノザ主義ともいべき精神と自然との渾然一体的融合に基づく独自の自然哲学を構築しようとした<sup>13)</sup>のに対して、この同じ課題の解決をもっぱら詩人の手に委ねようとする。論者にとってこのような観念論と実在論との絶対的融合は、それが創造的な神話的原世界たろうとする限り、その「理想の伝達機関」を「観念的なものと実在的なものとの調和に基づく詩」以外には見出し得ず、それ自体もはやいかなる哲学体系としても存続し得ない<sup>14)</sup> — 「観念論のみが哲学である。そして真の実在論は詩の実在論以外にはない」<sup>15)</sup> — からである。それゆえ「一にして全」なる「スピノザ主義の神」<sup>16)</sup>も従来の哲学的武装を脱ぎ捨て、もっぱら来るべき文学の新たな土壌のためのいわば大地母神的豊穡の基底としてのみ生き続けることができ、かつ、生き続けねばならないというのが、アテネウム版『神話論』におけるスピノザ哲学の存在意義である。そして論者はここではじめてスピノザを実名登場させ、この新しい神話の担い手に次のような一連の讃歌を捧げる。（下線部はウィーン版における削除、加筆その他の改変箇所。）

\*

1) 「スピノザは伝説の中の善良な老サトゥルヌスと同じ運命をたどったように、私には思われる。新しい神々がこの高貴な人物を学問の崇高な玉座から追い落とすのだ。想像力の神聖な暗闇の中へ彼は引き退いて、いまは他の巨人族たちと共に威厳に満ちた流亡のうちに生きている。彼をそこに滞まらしめよ。ムーサたちの歌声に包まれてかつての古き支配への追憶は一抹の憧れとなって溶けよ。彼はその体系の戦闘的な衣装を脱ぎ捨て、新しい詩の神殿の中にホメロスやダンテとともに棲み、神に酔えるすべての詩人たちの守護神や客人たちの仲間入りをするがよい。」<sup>17)</sup>

2) 「実際、スピノザを尊敬し、愛し、彼の弟子となりきることなくして、どうして詩人

- 
- 13) F. W. J. Schelling: Philosophische Briefe über Dogmatismus und Kritizismus. F. W. J. Schellings sämtliche Werke (SW), Stuttgart 1856ff. I / 1, S. 316f.  
 14) Mythologie. KA II, S. 315.  
 15) Ideen 96. KA II, S. 265.  
 16) Philosophische Lehrjahre (PL), IV-379. KA VIII, S. 226.  
 17) Mythologie. KA II, S. 316f.

たり得るのか、私にはほとんど理解できない。』<sup>18)</sup>

3) 「個々の案出において諸君の想像力は充分に豊かだ。[.....]しかしスピノザのうちに諸君はすべての想像力の始まりと終わりを、諸君ひとりひとりが抱って立つ普遍的な基盤と土壌を見出すだろう。そして想像力のほかならぬこの根源的にして永遠なるものを、すべての個別的なもの、特殊なものからこのように切り離すことこそ、諸君にとってきわめて歓迎すべきことであるはずだ。[.....]スピノザの感情もまたその想像力と同質のものである。それはあれやこれやの個々の事物に対する敏感な反応、高まるかと思えば再び萎え衰える激情ではないが、しかし清らかな香気が全体の上をあるかなきかに漂い、至る所、永遠の憧れが、静かな偉大さのうちに根源的な愛の精神を息吹く素朴な作品の深みからその余韻を響かせるのだ。』<sup>19)</sup>

4) 「合理的に思考する理性の歩みと法則を捨て、再び想像力の美しい混乱、人間の本性の根源的なカオスの中へ身を沈めるところに、一切の文学の起源があるのであって、このようなカオスに対してあの古代の神々の多彩な集団にまさる見事な象徴を私は知らない。なぜ諸君は偉大な古代のこれら壮麗な形姿を新たに蘇らせるべく立ち上がらないのか。ただ一度でもよい、スピノザに満たされつつ、また、現在の自然学が思索するすべての人々のうちに喚起せずにはおかないあの諸見解に満たされつつ古代の神話を考察してみるがよい。すべてはなんと新しい輝きと生命を帯びて見えることだろう。』<sup>20)</sup>

5) 「私がスピノザにこれほど大きなアクセントを置くからといって、それはけっして主観的な偏愛（私はこの種の偏愛の対象をむしろきっぱりと遠ざけてきたくらいだ）のためではなく、また、彼を新たな独裁の巨匠に祭りあげるためでもない。むしろ私はスピノザという実例によって神秘主義の価値と尊厳についての、そして神秘主義と文学との関係についての私の思想を、最も鮮明に、最も明確に示すことができたからである。私はこの点での彼の思想の客観性ゆえに他のすべての人たちの代表として彼を選んだのである。私の考えるところはこうだ。すなわち、『知識学』が、観念論の無限性や不滅の豊かさに気づいていない人々にとってさえ、少なくとも一切の学問にとっての一つの完成された形式、普遍的な図式であるように、スピノザもまた同様にあらゆる個性的な神秘論にとっての普遍的な根底であり支柱なのであって、このことは、神秘論についてもスピノザについても格別よく知っているわけではない人々でさえ、進んで認めるだろうと私は思う。』<sup>21)</sup>

\*

ウィーン版『神話論』はこれらのスピノザ讃歌を削除によって一掃するか、修正・加筆

18) Ebd., S. 317.

19) Ebd., S. 317.

20) Ebd., S. 319.

21) Ebd., S. 321.

によってスピノザ讃歌であることを隠蔽する。観念論と実在論との渾然一体的融合という基本構造自体は維持されながら、この融合をフィヒテと共に支えるスピノザは、その名はおろか気配さえも絶たれるという不整合が全面を覆う。

\*

- 1) スピノザは「新しいパルメニデス」に変わり、後半のホメロスのあとに「エンバドクレス」が加わり、神に酔えるが「自然に酔える」となって、この一節の舞台は古代ギリシャ的に擬装されるが、この改変部に先立って長文の加筆が挿入される（後述）<sup>22)</sup>。
- 2) この一節は全文削除。その欠所に「レッシングやゲーテのような明晰な詩的精神がいかにスピノザを尊敬し、愛しているかは私にも理解できるが、しかしだからといってこれら芸術の光明たちが汎神論を熟慮のうえ意図的に受け継いだとして断罪されるのは許されないだろう」という作為的かつ意味連関不明瞭な一文が挿し込まれる<sup>23)</sup>。
- 3) 最初のスピノザは「この最包括的な単一性という誘惑的な体系」という用語に変換され、次のスピノザは「あの哲学者」（新しいパルメニデス）という一種の曖昧な匿名性の中へ追いやられ<sup>24)</sup>、ためにここでの発言全体が論拠と方向性を失って漂流する。
- 4) スピノザに満たされつつが削除、自然学が「自然科学と哲学」に変更<sup>25)</sup>。
- 5) この一節は全文削除。その欠所を長文の加筆が埋める（後述）<sup>26)</sup>。

\*

この改変作業は、アテネウム版『神話論』の主柱の一つであるフィヒテの観念論にも及び、これに付加された「現代の偉大な現象」、「大いなる革命」、「革命の精神」<sup>27)</sup>等々の形容語はことごとく削除され、それぞれ「最も重要な知的現象」、「生の哲学ないし精神科学の開始と触発」、「大いなる知的再生と新たな活性化」<sup>28)</sup>という中立的表現に変えられる。しかし上記スピノザ讃歌 1) の改変部の直前に挿入される長文の加筆と、削除された同 5) への長文の加筆ほど、ウィーン版の露骨な介入を示す箇所はない。

第一の加筆は、「新しい神話」は「観念的なものと実在的なものとの調和に基づく詩」としてのみ成り立つという両版共通の命題に続く箇所だが、ここまで観念論と実在論の総合をフィヒテの世界創造的自我とスピノザの全一的な神的自然との融合の試みとして理解

22) W Bd. V, S. 268. (KA II, S. 316f. u. Anm.)

23) Ebd., S. 269. (Ebd., S. 317 u. Anm.)

24) Ebd., S. 269. (Ebd., S. 317 u. Anm.)

25) Ebd., S. 272. (Ebd., S. 319 u. Anm.)

26) Ebd., S. 274. (Ebd., S. 321f. u. Anm.)

27) KA II, S. 313f.

28) W Bd. V, S. 263f. (KA II, 313f. u. Anm.)

してきた聴き手は、それが「一切の事物の永遠の変化を説くヘラクレイトスらのイオニア哲学と不変の単一性を説くパルメニデスの教説」との「プラトンにおける総合」に転換されるという不意打ちを食らう。こうして「新しいプロメテウスよろしく神的なものの一切の力をもっぱら自我のうちにのみ想定しようとする巨人族的不遜」以外の何ものでもないフィヒテの思想も、「絶対的単一性の体系のうちで自然が理性と、理性が神性と融合・合体せしめられて、すべての差異が消滅し、すべての個々の事物が無限者の分かち得ぬ大洋にして深淵のうちに呑み込まれてゆく」かのごとく説くスピノザの思想も、共に議論の埒外へ放逐されたあと、論者は、昨今の時代状況のうちに深く根を張った近代の観念論と実在論の誤謬、特に後者の「神的事物の認識にとって一切を呑み込む底無し単一性の大洋の奔流」から「神的真理の永続的な姿」が救出されるまでは、戦いの続行は不可避であると説き、だが、押し寄せる悪しき波浪に「揺るぎなき堤防」として立ちはだかってくれる「世界歴史と啓示」という「二重の光」の中で「私は神的なものより純粋な認識が、精神と魂との新たな、あるいは新たに若返った学問が、神のうちに咲き初め、いよいよ豊かに展開してゆくを見るのだ」と主張する。アテネウム版、ウィーン版のいずれの『神話論』のどこにも接続しない、だが『現代の徴候』のどこにでも差し込めるこの概嘆のあと、ウィーン版の論者は改めて観念論の意義を「叡知的な運動、変化、再生への最初の有効な動因にして始動」という一事に、実在論の意義を「単一性の要素であると同時に想像力、すなわち単に詩的なものでしかない想像力に先行し、しかもそれ自体自然直観の能力以外の何ものでもないあの学問的想像力の支柱にして支点」という一事に尽きるとしたうえで、このような自然直観こそが「一切の神話の母」であり源泉である以上、世の観念論者が「単一性の体系」をあの「いにしへのスピノザ」もろとも永久に片づけることなど不可能であると続け、最後に「混沌が秩序づけられ、戦いが調停される」まではなお幾多の紆余曲折が予想されるとし、読み手にとっても聴き手にとっても出る幕のなくなったはずのフィヒテとスピノザをこの戦いの調停者として再度登場させ、しかも全文削除されることになるあのスピノザ讃歌 5) を簡略化してここに復活させる、『知識学』が、観念論の無限性に気づいていない人々にとってさえ、少なくとも一切の学問にとっての一つの完成された形式、普遍的な図式であるように、スピノザもまた同様にあらゆる種類の特殊な神秘論ないしは学問的想像力にとっての普遍的な根底であり支柱なのである」と<sup>29)</sup>。そしてこの論拠不分明なスピノザ復権のあとに、ようやくスピノザ讃歌 1) のスピノザに代えるに「新しいパルメニデス」をもってする不思議な改訂文が始まるのである。

もう一つの、全文削除されたスピノザ讃歌 5) の差し替えとして押し込まれた加筆は、フィヒテとスピノザという両主神が一扫されたあとの『神話論』を総括する。まず神話は「一切の芸術と文学が拠って立つ基盤」であり、この基盤の喪失が近代文学の最も深刻な障害であるとする両版共通の認識が確認され、次いで「叡知的運動の開始と最初の動因を

29) Ebd., S. 266ff. (Ebd., S. 315ff. u. Anm.)



含む」観念論によって呼び寄せられる「古い単一性の体系」である實在論が「一切の象徴的文学の源泉にして母胎である生産的構想力の本来の基盤」を成し、しかも「この単一性の体系が自然哲学を神話に結び付け、神話を通じてさらに象徴的描写としての芸術にも結び付ける糸」であるという、アテネウム版とは異質な視線が混入し、ここに「文学における自然の諸直観の新たな象徴的世界の描写」という課題が掲げられる。そしてこの課題の解決にこそ「自然およびすべての古代・近代神話」に対する「象徴的理解」の成否は掛かっているのだから、このような「自然の象徴的直観と描出の基盤」となるべき神話の創出が『神話論』の本来の主題であると説かれる<sup>30)</sup>。アテネウム版の原題『神話についての講話』が『神話および象徴的直観についての講話』と改題されているのはまさに象徴的であって、文中、スピノザ排除と同様の執拗さをもって遂行される神話の語への「象徴法としての」という新たな概念付加によって、アテネウム版において前提、かつ要請されていた神話の宇宙創造的根源力はいわば根こそぎにされる。

## 3

**ルドヴィーコ**：アテネウム版の論者だった私が、同じルドヴィーコとしてウィーン版の原稿を手にしたときには愕然とした。身に覚えのない転向宣言とはこれだ。なりふり構わぬスピノザ追放劇。話の大筋はそのまま、衣装だけはスピノザ・フィヒテ仕立の近代風からバルメニデス・ヘラクレイトス仕立ての古代風に着替えるとの指示。論述後の討論でも、私が「スピノザをただ代表者として挙げるにすぎない」と述べたくだけは、「古代人のもとではバルメニデスを、近代人のもとではスピノザを」と言わねばならない<sup>31)</sup>。

**アントーニオ**：私の場合も「スピノザ」は「この単一性の体系」となり<sup>32)</sup>、「プラトンがこの点に関してスピノザと同様に客観的であるとしても、われわれの友人が文学の源泉を實在論の秘儀のうちに示すために後者を選んだのは賢明だった」も、前段は「プラトンがその精神的完全性の諸理念と同様に自然の秘儀にも精通しているとしても」になり、後段の「秘儀」は「自然概念」に、「後者」(スピノザ)は「他の人々」になる<sup>33)</sup>。

**マルクス**：私が、スピノザはその「野蛮な形式のゆえに何とも頂けない」と述べた箇所ですえ、「絶対的単一性のあの賛美された告知者たち、古代人たちのもとに最も拙劣な詩人の一人として現れるバルメニデス、そしてさらでだに干からびたスピノザ」<sup>34)</sup>といった具合に、私の意に沿いつつも実に執拗だ。

**カミラ**：私がルドヴィーコに、「スピノザの精神を美しい形式で叙述してくださることはできないかしら。あるいはむしろあなたが實在論と名付けているあなたご自身の見解を

30) Ebd., S. 274f. (KA II, S. 321 u. Anm.)

31) KA II, S. 325 u. Anm. (W Bd. V, S. 280.)

32) Ebd., S. 322 u. Anm. (Ebd., S. 276.)

33) Ebd., S. 325 u. Anm. (Ebd., S. 280.)

34) Ebd., S. 325 u. Anm. (Ebd., S. 280.)

といったほうがよいかしら」と言う箇所も、「スピノザの精神」が「実在性の精神」に置き替えられて一つの文に纏められ<sup>35)</sup>てしまった。とにかく徹底しているわね。

ルドヴィーコ：あの人がスピノザ・フィヒテの総合をパルメニデス・ヘラクレイトスの総合にすり替えてゆくのは、1803年のパリ私講義『ヨーロッパ文学の歴史』の『プラトン論』以後のことだから、ウィーン版での衣装替えもただの思いつきではない。それどころかプラトン哲学の本質を「ヘラクレイトスの二元論とパルメニデスの実在論との総合」、「永遠の変化と生成の直観を無限の理性の完全な静安と永遠の調和への信念とに合一させよう」とする志向<sup>36)</sup>と捉え、無限の生成と永遠の一者との絶対的融合の理想を追いつけたこの哲学者を「進展的思想家」(progressiver Denker)<sup>37)</sup>と呼んだあの人の思想史家としての知見は、精神的生の無限の生成発展の全域を包括するものであるがゆえに、それ自体もまた「永遠に生成するのみで、けっして完結しない」ことをその本質とする「進展的普遍文学」(progressive Universalpoesie)<sup>38)</sup>と定義されたロマン主義文学の理念の新たな展開と見れば、一貫性のある卓見だとは思ふ。しかし今回の差し替えはあまりにも見え透いている。「新しいパルメニデス」などによくも言えたものだ。

ロターリオ：確かにウィーン版のグロテスクな点は、基本構造を変えぬまま — つまりスピノザもフィヒテも現役のまま — この両支柱に支えられてこそ成り立つ世界を、この両支柱に別の名札を貼り付ければ改造できると思い込んだところにある。ウィーン版はこの短絡的な手法のために生じた穴埋め作業に追われ、急場凌ぎの修正や削除・加筆に翻弄される羽目となり、聴く側も煩わしい限りだが、しかし視点を変えて眺めると、ルドヴィーコがいま指摘したアテネウム期の文学理念の継続という意味で、両版は意外にどうか、当然というか、断絶なく繋がっているのが見えてくる。この連繋は『神話論』本論でよりはむしろ論述後のわれわれの討論の中で確認される。例えば「芸術のあらゆる神聖な戯れは世界の無限の戯れの、永遠に自己自身を形成し続ける芸術作品の遙かな模倣でしかない」という私の発言は、「神聖」の文字を削除のうえ、「芸術のあらゆる精神的な暗示と戯れの、永遠に自己自身を形成し続け、反映し続ける創造者の芸術作品」に変わっているほかは、趣旨はそのまま生きているし、また、「それゆえ一切の芸術と学問の最内奥の秘儀が文学の財産なのだ。そこからすべてが流れ出たのだから、すべては再びそこへと流れ戻ってゆかねばならない。人類の理想的な状態においてはただ文学しか存在しないだろう。というのもそこでは諸芸術と諸学問とはいまだ一つのものであるだろうからだ。われわれの状態にあっては真の詩人だけが理想的人間であり、普遍的芸術家であるだろう」という箇所も、「秘儀」が「生命の萌芽」に、「一つのもの」のあとに「原初においてそうだったように」が挿入され、「われわれの状態」が「われわれの現在の寸断された状態」に、

35) Ebd., S. 327 u. Anm. (Ebd., S. 282.)

36) Geschichte der europäischen Literatur. KA XI, S. 120.

37) Entwicklung der Philosophie. KA XII, S. 211f.

38) Athenaeum-Fragment 116. KA II, S. 182f.

「真の」が「真にして完全な」に変えられただけだ<sup>39)</sup>。

**ルドヴィーコ**：なるほど。「すべての芸術と学問の力が一つの中心点において出会うというロターリオの意見に賛同する」<sup>40)</sup> という私の言葉は、確かに無修正だ。

**アントーニオ**：「一切の芸術、一切の学問の伝達と叙述は、詩的構成要素なしにはあり得ない」<sup>41)</sup> という私の発言も無事通過だ。アテネウム期とウィーン期との架橋の可能性はこの辺にあるかもしれない。あのロマン主義文学の理念に発し、1800年に開始されるイエーナ大学講義『超越論的哲学』や同時期の『レッシング論』、次いでパリ時代の私講義『ヨーロッパ文学の歴史』などで確立されてゆく「一切の学問と芸術としての文学、すなわちエンツィクロペディー」<sup>42)</sup> の構想が、両『神話論』の紐帯となりそうだ。

**ロターリオ**：紐帯といえば、「エレウシスの秘儀」の意義についての私の言及、例えば「これらの秘儀の痕跡を通してだけでも、私は古代の神々の意味を理解するすべを学んだのだ」という私の言葉も、「これらの秘儀において参入者たちに啓示されたものの痕跡を通してだけでも、古代の神話の深遠な意味を理解することができる」<sup>43)</sup> といったぐあいに多少の修正、加筆等を除けば、いや、全文削除のうえの加筆の場合でさえ、両版にさしたる内容的隔たりはない。こうした手直しは、ウィーン版にそのほとんどが収録されている初期の古典文献学的諸論に施された手直しと同質のもので、故ベラー教授が期待したあの「脚注」の役を果たすものと見てよいだろう。

**マルクス**：ヴィンケルマンについての私の一言が、「秘儀の根底を成し、そしてこの秘儀を通じて古代神話全体の根底を成していたあの熱狂的な自然観」<sup>44)</sup> に関する新たな発言を触発しているあたりも、そうした「脚注」に属するものだろう。

**ロターリオ**：「脚注」問題はともかく、私が、「本来いかなる作品も自然の新たな啓示たるべきものだ。それが一にして全であることによるのみ、作品は作品となる。ただそのことによるのみそれは習作と区別される」と述べた箇所への全面削除のうえの加筆、「それが一にして全であり、一つの小世界であり、自己のうちに完結し、自立自存し、明確に縁取られた一個の全体でありながら、同時に万有、あるいは自然の大きな全体と絡み合い、この全体の萌芽を自己のうちに孕んでいるということによるのみ、はじめて作品は真に作品となる」という一文<sup>45)</sup> は、両版を繋ぐ絆の固さを際立たせるものだ。

**アンドレーア**：まさに「エンツィクロペディー」として作品概念だ。しかも「一にして全」なる「スピノザ主義の神」というあの1798年の覚書<sup>46)</sup> を連想させる概念が1823年のウィーン版にも息づいているのは注目に値する。

39) Mythologie. KA II, S.324 u. Anm. (W Bd. V, S. 278.)

40) Ebd., S. 324 u. Anm. (Ebd., S. 279.)

41) Ebd., S. 324 u. Anm. (Ebd., S. 279.)

42) Geschichte der europäischen Literatur. KA XI, S. 7

43) Mythologie. KA II, S. 326 u. Anm. (W Bd. V, S. 281.)

44) Ebd., S. 326 u. Anm. (Ebd., S. 281.)

45) KA II, S. 327 u. Anm. (Ebd., S. 285.)

46) PL IV-379, KA XVIII, S. 226.

ルドヴィーコ：なるほど。腹立ち紛れに見落としていたものが眼に入ってきたようだ。あの人が何としても残したかったものがね。スピノザとフィヒテを支柱としながら、いまはそれと気取られたくないあの基本構造がそれだ。これがあの人の守り抜きたかったいわば忘れ得ぬ青春の記念碑だったのだな。だがこうして守り抜かれた記念碑も、アテネウム版を知る者には廢墟に立つ墓標、スピノザの名を刻んだ墓標としか見えないだろう。

ロターリオ：その憤懣はわかる。しかしあの人にとって『アテネウム』誌こそが生涯の冠だったのだ。『アテネウム断章集』116で一挙に言葉となって噴出し、その後のあの人の思想的行程を規定し続けてゆく哲学的営為と文学的営為とを包括する「進展的普遍文学」ないし「エンツィクロペディー」の理念は、常にスピノザと道連れだった。いや、この理念の具現者がスピノザだったことは、「スピノザは、学問と芸術とが渾然一体となっている唯一の人、無限の理性の高貴な神官である」<sup>47)</sup>、「スピノザは哲学のダンテであると同時にシェイクスピアである」<sup>48)</sup>といった1797年の覚書に端的に表現されている。もっともこうしたスピノザ礼賛も1804年に始まるケルン私講義になると、スピノザの实在論的体系を宿命論、すなわち無神論と断定し、その行き着く果ては「空無と虚無の底無しの深淵」、「ニヒリズムと呼ばれるに相応しい哲学的混迷」であると論難する方向<sup>49)</sup>へと急転するが、しかしスピノザへの強い眼差しは衰えず、「スピノザは誤謬の完璧な総括である」としながらも、この誤謬の徹底的追及こそが真理へ到る「哲学的修行時代の一階梯」であるとする同時期の覚書<sup>50)</sup>は、切り離せば血の出る両者の関係を想像させる。

ルドヴィーコ：抜け目なく止血もできたのさ。『コンコルディア』誌発行人としてあの人はスピノザ主義者の烙印を恐れたのだ。地中海の古代異教世界はあの人のフマニオーラの精神に合致するばかりか、それへの信条告白はもはや危険ではない。危険なのは異端のほうだ。ヤコービがモーゼス・メンデルスゾーン宛の書簡体公開状『スピノザの教説について』<sup>51)</sup>で巻き起こしたスピノザ論争の余燼はまだ燻っていたかもしれない。むろんあの人はシェリングのようにむきになってヤコービを「大異端審問官」呼ばわりする<sup>52)</sup>ほど生真面目ではないが、危険は避けるに越したことはない。そこであの異端の息子『神話論』

47) PL II-1050, ebd., S. 116.

48) PL II-729, ebd., S. 90.

49) Propädeutik und Logik. KA XIII, S. 361f.

50) PL X-386, KA XIX, S. 126.

51) Über die Lehre des Spinoza, in Briefen an Herrn Moses Mendelssohn. 1785. F. H. Jacobi's Werke. Darmstadt 1968. Bd. IV.

52) 1812年シェリングは、彼の絶対的同一性の体系を「スピノザ主義と同じもの」と見なし、これを無神論と位置づけようとしたヤコービの『神的諸事物について』(1811)への反論のなかで、ヤコービが「まるで正規の大異端審問官のような権能を私に対して發揮しようとしているからには」、自分としても防衛策を講じなければならないとしている。(F. W. J. Schellings Denkmal der Schrift von der göttlichen Dingen des Herrn Friedrich Heinrich Jacobi. SW I/8 S. 35.)。しかしそれ以前にもシェリングは、例えば1809年の『自由論』において、レッシングを引き合いに出しながら、哲学的体系の批判には「異端審問官づら」はまったく不要であると暗にヤコービを当て擦っている。(Philosophische Untersuchungen über das Wesen der menschlichen Freiheit und die damit zusammenhängenden Gegenstände. SW I/7 S. 412.)

を出来合いの古代ギリシャの衣装にくるんで脱出を図ったのだ。

**ロターリオ:** 何としても連れ出したかったのだよ、その子を。誰の手にも渡したくなかった一番の秘蔵っ子、1799年には「スピノザはいわば哲学の中心的太陽である」<sup>53)</sup>、1800年には「永遠の生命は、観念論によって躍動せしめられたスピノザである」<sup>54)</sup>とまで書かせたあの若き日のスピノザ賛仰の落し子をね。こんなことを言うと、哲学の初心者はみなそうしたものとというヘーゲルの嘲笑が聞こえてきそうだ。「哲学を始める者はまずスピノザ主義者たらざるを得ない。魂はこれまで正しいと思ってきたすべてのものがその中で没落してゆくあの実体のエーテルに身を浸さざるを得ない」<sup>55)</sup>と。そのヘーゲルによれば、スピノザの命を奪った肺病は「彼の体系にぴったり」の疾患だそうだ。つまりスピノザの「硬直した不動性」の体系の「唯一の活動」が「一切のものを実体の深淵の中へ投げ込むこと」でしかなく、それゆえこの深淵の中で「一切のものはただ消え去ってゆき」、「一切の生命は立ち枯れてゆく」ほかないのだから、彼がこの長患いの果てに衰弱死するのは当然の帰結だ<sup>56)</sup>というわけだ。だがスピノザは、いや、この時期に登場する新思想としてのスピノザ主義は、ハシカ並みの小児病でも消耗性の時代病でもない。

**ルドヴィーコ:** そもそもレッシングが「スピノザ主義者、すなわち無神論者」だったという衝撃的な「事実」を暴露したヤコービによれば、発端はゲーテの未発表の詩『プロメテウス』で、その死の前年の1780年のある夏の夕暮れにヤコービから手渡されてこの詩を一読したレッシングは、「この詩の拠って立つ視点こそ私の視点だ」と言い放ち、「神性についての正統的な諸概念は私にはもはや不要だ。そういうものは我慢できない。一にして全！私が知っているのはこれだけだ」と明言し、それではあなたはスピノザの賛同者なのかと問うヤコービに、「私が誰かの名に託して自分を呼ばねばならないなら、それ以外の人物を私は知らない」と答え、自分にとって「スピノザの哲学のほかにいかなる哲学もない」と言い切ったという<sup>57)</sup>。天界の支配者ゼウスに向かって大地の支配権の奪還を誓い、この大地で「自分の姿に似せて」、「自分と同様に苦しみ泣き、喜び楽しみ」、「自分と同様に天上の支配者を崇拜しない種族」となる人間を造るのだと宣言するプロメテウスの反逆を歌ったこのゲーテ25歳の時の詩<sup>58)</sup>に、一切の超越的存在者の拒絶、超越そのものの徹底的内在化を意味するスピノザの全一性の思想を読み取って感動することのできたレッシングは、もはやスピノザ抜きで近代思想は語れないと確信したに違いない。

**アンドレーア:** 確かあの人も1797年の覚書の一つで、「近代文学はダンテをもって始まり、近代哲学はスピノザをもって始まる」<sup>59)</sup>と書いている。

53) PL V-967, ebd., S. 401.

54) Fragmente zur Poesie und Literatur (FPL), IX-559, KA XVI, S. 300.

55) G. W. F. Hegel: Vorlesungen über die Geschichte der Philosophie, III. G. W. F. Hegel Werke, Frankfurt a. M. 1971. Bd. XX, S. 165.

56) Ebd., S. 160. u. 167.

57) Über die Lehre des Spinoza. F. H. Jacobi's Werke, Bd. IV, S. 51ff.

58) Ebd., S. 52ff.

59) FPL V-1036. KA XVI, S. 171.

**ロターリオ**：その最も強力な証言者がシェリングだろう。例えばあの『哲学的書簡』の11年後の1806年に書かれた『世界霊』第二版への前文。一切の事物を結合し、全なるものうちなる一者を成す「絆」である重力と、一切の事物の「内的中心」、「生命の閃光」である光体とが無限の闇と無限の光の両極として対立しながら「絶対的コブラ」によって解き難く振り合わされて織りなす宇宙創造の営み——この一切のものが一者のうちに合流し、しかも永遠にして絶対の「神的絆」によって無限の連鎖のうちに固く結ばれつつ渾然一体となり、そこにはもはや「外自然的」ないし「超自然的」なものは一切存在せず、跳び越えるべきいかなる「柵」も「境界」もなく、「内在も超越も完全に、そして等しく空疎な言葉と化してしまう」ような「神に満たされた全一的世界」——このような絶対的世界への暗鬱な熱狂のうちに身を沈めながら、シェリングは、「われわれが個々の事物を認識すること多ければ多いほど、それだけ多くわれわれは神を認識する」というスピノザの言葉を次のように敷衍する。「われわれはいよいよ高まる確信をもって永遠なるものの学問に専念する人々に向かってこう呼び掛けねばならない、『自然学のもとへ来たれ、そして永遠なるものを認識せよ』と。」そして創造の「測り難い深み」から立ち昇ってくるかに見える万物の「底知れない本質」も、やがては「見開かれた意味深い眼をもって」研究者たちを見つめ返し、それらの「形成物の神々しい混乱と捉えがたい豊かさは、それらを悟性によって捉えようとする一切の期待を断念してしまうなら、最後には彼らを自然の聖なるサバトへ導き入れてくれるだろう」<sup>60)</sup>と。

**アンドレーア**：この結びの一文は、「合理的に思考する理性の歩みと法則」を放棄して「想像力の美しい混乱、人間の本性の根源的なカオスの中へ身を沈める」ところに「一切の文学の起源」は見出されるとし、この根源的なカオスの最高の象徴として「古代の神々の多彩な集団」を挙げ、その壮麗な姿を蘇らせるために「スピノザに満たされつつ」古代神話を研究せよと提言したアテネウム版『神話論』のあの箇所を思い起こさせる。

**アントーニオ**：シェリングとの関係は濃密だ。私はかねがね観念論の精神に浸透されたスピノザ的実在論という『神話論』の基本構造が、「神性への、万物の源泉への帰還、絶対者との合一、自己自身の放棄」という狂信的没我の「破壊的で否定的な原理」に耐えつつ構築されたスピノザの絶対的客観世界を「知的直観」という絶対的主観の内面世界の客観化と読み替えてゆく『哲学的書簡』のスピノザ解釈<sup>61)</sup>と無縁ではないと思っている。実際、あの人は1797年の『一般文学新聞』に寄稿したこの『書簡』への書評で、「彼の哲学の魂は、古来われわれが哲学者と呼んでいる注目すべき人種の最大級の者たちを特徴づけてきた存在に対するあの全的で自由な感覚、あの熱狂である」<sup>62)</sup>と絶賛している。

60) Über das Verhältnis des Realen und Idealen in der Natur oder Entwicklung der ersten Grundsätze der Naturphilosophie an den Principien der Schwere und des Lichts. SW I / 2. S. 359-378. S. 364, 369, 372, 377, 378.

61) SW I/1, S. 316-321.

62) Rezension der vier ersten Bände von F. J. Niethammers Philosophischem Journal. 1797. KA VIII, S. 24.

**マルクス**：しかしその5年後の1802年にはもう、シェリングの同一哲学の体系を「愛のかけらもない」スピノザ主義、「想像力、愛、神、自然、芸術、要するに語るに足る一切のものがもはやまったく語り得なくなってしまう徹底して純粋な理性の体系」だと決めつけ、「絶対的な背理がかくも純粋かつ明確に述べられたことはいまだかつてなく」、この「みずから求めて嵌まり込んだ底無しは無」、この「完璧な冷却」から立ち戻るすべはもはやないと酷評している<sup>63)</sup>。「神は無から有を創造した」という立場を擁護せざるを得ないところに来つつあったあの人にとって、シェリングのスピノザ主義はすでに「無から無が生じる」というヤコービの定式<sup>64)</sup>通りのニヒリズムだったのだろう。

**ルドヴィーゴ**：それにしてもスピノザ・フィヒテからパルメニデス・ヘラクレイトスへの鞍替えは茶番だ。だから私はあの人がひた隠ししておきたかったに違いないある短い覚書をすっば抜くことにする。1799年のものだが、「フィヒテとスピノザの総合[としての]プラトン」<sup>65)</sup>というのがそれだ。この時空を絶した概念結合、私の好きなあの人の言葉の一つだ。アテネウム版『神話論』の論者選ばれた私のね。これが「パルメニデスとヘラクレイトスの総合としてのプラトン」の隠れたテキストだったのさ。ついでにもう一つ、「パルメニデスは単に自然汎神論の一つにすぎず、そこには啓示のひとかけらもない」<sup>66)</sup>という1805年の覚書を加えれば、追い打ちは完了だ。この時期すでに啓示信仰に身を置いていると信じていたあの人にとってスピノザもパルメニデスも同罪のはず。あの差し替えはただもうスピノザ排除の一念に駆られての失速だったことがこれではっきりする。永遠のスピノザ主義、いや、永遠の隠れスピノザ主義、これがあの人の馬脚さ。

**ロターリオ**：わかった。私も他の討論者たちもウィーン版の舞台が何かと居心地悪く、妙に老け込んだ感じがしていたのだ。そこで一同あの記念すべき1800年のドイツの春——詩的・哲学的混成語が織りなす美文と麗辞がまだ瑞々しい生命を失わずにいた頃のドイツの春へ舞い戻ってみようではないか。そしてあの人がノヴァーリスに「きみは境界線上を彷徨ったりはしない。きみの精神のうちでは詩と哲学は渾然として一体である。きみの精神は捉え難い真理を語るそうしたさまざまな比喩において私に最も近かった。きみの考えたことは私も考え、私の考えたことはきみも考えるだろう、あるいはもうすでに考えているのだ」<sup>67)</sup>とエールを送れば、すかさずノヴァーリスも「われわれの時代の使徒となるべく遣わされ、生まれついた者があるとすれば、きみこそそれだ」<sup>68)</sup>と応答し、また、「近代文学の歴史全体は次のような哲学の短い本文に対する絶え間のない注釈である——すべての芸術は学問となり、すべての学問は芸術となるべきである。文学と哲学は合体せねば

63) 1802年4月12日付のシュライエルマッハー宛の手紙。Aus Schleiermacher's Leben. In Briefen. Berlin, 1860-63, 1974. Bd. III, S. 314f.

64) Über die Lehre des Spinoza. F. H. Jacobi's Werke, Bd. IV, S. 56.

65) PL IV-1201, KA XVIII, S. 295.

66) PL IX-67, KA XIX, S. 49.

67) Ideen 156. KA II, S. 272.

68) Novalis Schriften, Stuttgart 1983. Bd. 3, S. 493.

ならない」<sup>69)</sup>、あるいは「哲学と文学とが切り離されている限りでは、なされ得ることはすべてなされ、完成されている。ゆえにいまや両者を合一すべき時である」<sup>70)</sup> というあの人の要請に、シェリングが「客観的世界はただ根源的な、いまだ無意識的な精神の詩である。哲学の普遍的なオルガン — そしてその丸天井全体の要石 — が芸術哲学である」、「知的直観の客観性は芸術それ自体である」、「われわれが自然と呼んでいるものは、神秘的な不思議の書物の中に封じ込められた一篇の詩である」、「芸術から客観性を取り去るならば、芸術は芸術であることをやめて哲学となり、哲学に客観性を与えるならば、哲学は哲学であることをやめて芸術となる」<sup>71)</sup> と感応した、あの遙かな時代に再び身を置き、あの人が「学問と芸術との渾然一体」を具現している「無限の理性の高貴な神官」スピノザに思いを託しつつ、この学問と芸術との、哲学と文学との渾然一体を唯一可能ならしめる神話的原世界の脈動を無媒介的に感得する能力を「予見」(Divination)と呼び、この超越的能力を「無限なるもの(神性)」のみへと向かうスピノザの「思弁の体系」と「無限なるものへの根源的反省である意識」のみへと向かうフィヒテの「反省の体系」との融合による神性への無限憧憬として演繹しようとしたイェーナ大学講義『超越論的哲学』<sup>72)</sup>での悪戦苦闘を思い起こし、そしてほかならぬこの予見の能力の未来への展望をもって終わる両『神話論』の結びの一節を読み比べつつ、われわれの議論を切り上げるとしよう。ルドヴィーコ、まずはアテネーウム版のを読んでくれないか。

ルドヴィーコ:「すべての思考は、一つの予見である。しかし人間はいまようやく自己の予見能力を意識し始めたばかりである。どれほどの測り知れない拡張を、この能力はこの先経験することだろう。いや、いまこの時点においてもだ。思うに、この時代を、つまり全面的な若返りのあの大なる過程を、永遠の革命のあの諸原理を理解するほどの者ならば、人類の両極を把握し、原初の人間たちの行為ならびに来たるべき黄金時代の性格を認識し、理解することに成功するに違いない。そのとき饒舌は熄み、人間は自分が本来何であるかを知り、さらにこの大地を、そして太陽を理解するだろう。」<sup>73)</sup>

ロターリオ:ウィーン版は、「永遠の革命のあの諸原理」を「永遠の再生の根本法則」に、「饒舌」を「空虚な、抽象的弁舌」に、最後の一文を「人間は自分がこの地上において、そして太陽に対して本来何であるか、何であるべきかを理解するだろう — 創造する精神によってその中央に、その頂点に据えられた被造の自然の王として」と直せばよいだけのものだ<sup>74)</sup>。むしろ「アテネーウム版」のほうが断然いい。ルドヴィーコ、そろそろ機嫌を直してもいい頃だと思いがね。

69) Lyceum-Fragment 115, KA II, S. 161.

70) Ideen. 108, ebd., S. 267.

71) System des transzendentalen Idealismus. SW I / 3, S. 349, 625, 628, 630.

72) Transcendentalphilosophie. KA XII, S. 3-31.

73) Mythologie. KA II, S. 322.

74) W Bd. V, S. 276. (KA II, S. 322 u. Anm.)